秋田蕗

第 32 号
俳人協会秋田県支部報
〔題字〕故 岡田夏生氏

新型コロナウイルスに翻弄される日々

令和２年２月、中国の武漢市が都市封鎖され、収容しきれない患者で病院が崩壊しているニュースが流れた。当初は中国でえたいの知れない疫病が蔓延しているようだと、半ば他人事のように見ていた疫病は、新型コロナウイルスによるものだと分かり、たちまち全世界に感染の連鎖を広げた。

ほどなく日本でも感染拡大が続き、政府は感染者の多い都県を対象に４月７日緊急事態宣言を発令、５月25日解除したものの、第２波、第３波と感染拡大は続いている。

新型コロナウイルスに感染しないようにするための対策が「３つの密（密閉・密集・密接）」の回避であるため、日常生活は大きく制約され、秋田支部俳句大会は紙上大句会に、吟行俳句大会は中止するとともに、５月の総会は書面表決に変更を余儀なくされた。

このように、令和２年は新型コロナに翻弄されたため、『秋田蕗』誌面は、これまでの趣とは異なるものとなった。

なお、令和３年に入ってもこの感染拡大は続き、３月から医療関係者のワクチン接種がはじまったものの、終息の行方は混沌として見通せない状況である。

新型コロナウイルス感染拡大に伴う俳人協会会長メッセージ

再会の日を信じて

俳人協会　会長　大串　章

会長メッセージ

新型コロナウイルスの感染拡大により、４月には「緊急事態宣言」が発令されました。生活に大変な影響を受けられている会員の皆様に心よりお見舞いを申し上げます。今、仲間と会うことも出来ず、吟行にも行かれない。当然、句会で集まることも出来なくなりました。まさに俳人の私たちにとっても経験したことのない局面に立たされているのです。いつ終息に向かうのか、まだまだ先の見えない不安に心痛むばかりですが、季節は巡り必ずまた明るい日が来ます。

俳人協会におきましては、会員の皆様の健康と安全を考慮した結果、俳句文学館の休館ならびに行事・講座等を中止または延期としました。感染を防ぐ生活様式を踏まえつつ、一日も早く通常の生活にもどり、皆様と俳人協会の活動をともにできる日が訪れることを心から願っています。くれぐれも健康に気をつけてお過ごしください。

令和２年６月５日付け俳句文学館

第30回俳人協会秋田県支部俳句大会の成績

秋田県支部では、５月17日、定期総会終了後に俳句大会を予定したが、新型コロナウイルスの情勢を踏まえ紙上大会に変更して実施。大会には、会員及び一般俳句愛好者より２５２句が投句され、本部幹事の長嶺千晶先生と県内特定選者３名による選と選評が行われた。

入選句、互選高点句は次のとおりであった。

長嶺千晶選

特選	白神の樵の目覚むる木の芽雨	大橋　風太
同	初蝶を生み出す風の力かな	斎藤　淳子
秀逸	砂日傘本音語れず波の音	伊藤恵美子
同	夕霞多喜二の郷は灯を早む	塚本　佐市
同	鳥海山に深く一礼農始	加藤　一弥
佳作	鎮魂の灯の冴え返る浜辺かな	米屋　道子
同	旅に買ふデニムのバック夏に入る	高田　洋子
同	世の波になじまぬ父の日なりけり	小林　呼溪
同	遺句集に日矢の一条新樹燃ゆ	木村　登龍
同	手を洗ふことにも馴れて弥生かな	伊藤　青砂
同	末つ子の弟となる子猫かな	遠山せつ子
同	また一つ泡より落ちて蝌蚪泳ぐ	鎌田　麗子
同	海豹の哺乳ほのぼの春日さす	天野美奈子
同	潟波の光り親しき夏はじめ	渡邉　雷夢
同	花屑を吐き出す鯉の波紋かな	加瀬谷敏子

園部蕗郷選

特選　古時計振り子ゆつくり日脚伸ぶ　石川一風子
秀逸　寝転べば空広がりぬ春の草　大橋風太
同　鳥帰る光の棒となりきつて　斎藤淳子
佳作　登るほど鳥語かしまし春の山　岩谷塵外
同　行く春や一年毎といふ齢　安倍幸一
同　かうかうと畑人に声帰白鳥　伊藤杯紅
同　しやぼん玉素敵な嘘をつくやうに　遠藤史都
同　旅行けば出羽も津軽も田植終ふ　佐藤悠水

伊藤慶子選

特選　啓蟄や埴輪声なき声を秘む　塚本佐市
秀逸　泰然と舞ふ鳶一羽春の風　藤井淳一
同　鳥雲に藍染めの藍手に残る　塚本佐市
佳作　手作りの紙漉き卒業証書かな　瀬田川博子
同　遺句集に日矢の一条新樹燃ゆ　木村登龍
同　一筋の川一筋の光る風　熊谷尚
同　木の芽晴介護士の声弾みくる　佐々木あや子
同　師の恩のふかきをいまに春の夜半　加藤一弥

熊谷尚選

特選　郭公の鳴くや約束果すごと　安倍幸一
秀逸　返信に返信重ね夜のぬくし　木村登龍
同　棟上げの手締めのひびく木の芽晴　伊藤慶子
佳作　雲のゆく方に故郷草の笛　木村登龍
同　初夏の風を従へ大漁旗　松井憲一
同　春昼やゆつくりまはす万華鏡　宇佐見レイ子
同　初蝶を生み出す風の力かな　斎藤淳子
同　花冷えや秋田舞妓の立ち稽古　加藤一弥

互選の得点順位（7点まで10句）

一席⑫遠足の列よろこばす牛の声　佐々木公平
二席⑨初夏の風を従へ大漁旗　松井憲一
二席⑨また一つ泡より落ちて蝌蚪泳ぐ　鎌田麗子
二席⑨鳥帰る光の棒となりきつて　斎藤淳子
五席⑧はらからの眠る大地へ鳥帰る　佐々木踏青子
五席⑧鳥海山に深く一礼農始　加藤一弥
七席⑦春昼やゆつくりまはす万華鏡　宇佐見レイ子
七席⑦行く春や一年毎といふ齢　安倍幸一
七席⑦児の丈に跼みて渡す雛あられ　藤原よう子
七席⑦一筋の川一筋の光る風　熊谷尚

公益社団法人俳人協会
第31回東北俳句大会・青森大会入選作品

東北俳句大会・青森大会は、9月6日、青森市で開催を予定したが、新型コロナウイルスの情勢を踏まえ紙上大会に変更して実施。

支部員の特選句は、次のとおりであった。

【大会賞】

花吹雪太宰千空倶子逝く　岡部いさむ

【特選】

坂内佳禰選

花吹雪太宰千空倶子逝く　岡部いさむ

馬場吉彦選

風鈴や夫の残せし釘に吊る　伊藤恵美子

山崎雅葉選

烏賊干しに龍飛の風の仮借なし　岩谷塵外

佐藤景心選

駅弁の紐で綾取り初夏の旅　木田橋敬一

鶴岡行馬選

しゆるしゆると薪が欹きをり雁供養　岩谷塵外
蕗の薹はづむを押さへ刻みをり　小川千草

伊藤寛選

携帯に亡き夫立てる桜かな　島きく子
一つ灯に闘病の子と受験の子　木村登龍

伊藤青砂選

最後かもしれぬ父との山登り　熊谷尚

公益社団法人俳人協会主催 第59回全国俳句大会 入選作品

令和２年９月15日開催を予定していた第59回全国俳句大会はコロナ禍のため中止となったが、発表された当県支部員の入選並びに予選通過作品は次のとおりであった。

なお、今大会の投句総数は１万２，５２０句、予選通過作品は２，０５１句であった。

西村和子選

入選

割り箸のきれいに割るる立夏かな　寺田　恵子

予選通過作品

大花火山河ゆらして続きけり　桜庭　睦
割り箸のきれいに割るる立夏かな　寺田　恵子
天空の風とたたかふ武者絵凧　岡部いさむ
役終へて梵天の縄ゆるみけり　加瀬谷敏子
長病みの笑みの身に入む話かな　佐藤　景心
畔焼きのさ走る焔闇を縫ふ　山田　草人
湯くぐりの椀乾きをり春の昼　佐藤　茂樹

公益社団法人俳人協会主催 第59回全国俳句大会（ジュニアの部）八峰町立峰浜小学校学校賞受賞

柳川大亀氏が指導する八峰町立峰浜小学校（児童数１０５人）が栄えある学校賞を受賞した。

柳川氏の指導は、年１回、学年ごとに俳句教室を開催して直接指導するとともに、児童に俳句手帳を配布して思いつくまま作句させ、随時回収して添削助言するというもの。指導期間は、峰浜小学校に統合される前の塙川小学校当時から数えて36年目を迎えている。

俳人協会主催の全国俳句大会のほかにも、「一茶まつり全国俳句大会」に毎年参加し、同俳句大会では、今年も含めて５年連続の学校賞となった。

同氏は、この他にも、７回目を迎えた町教育委員会が主催する「あきた白神子ども俳画大会」に審査委員長として参画、子どもたちの育成に当たっている。

個別作品・優秀賞

うみのみずつかいほうだいみずでっぽう　２年　日沼依知海
ぬいぐるみばゅっとまふゆのお友だち　３年　田畑　陽色
けしごとブランコゆらしなかなおり　４年　勝山　光
波音をじしゃくにひかれゆく真夏　６年　金平　喜一
舟虫や大図かんめく海の岩　６年　嶋田　暖人

柳川氏が参画する俳画大会の入賞作品集表紙

学校賞受賞を喜ぶ峰浜小学校児童

第23回支部会員鍛錬句会の成績

秋田県支部では、令和元年12月14日を投句締切として第23回支部会員鍛錬句会を実施、67名が参加した。特定選者による入選句、互選高点句は次のとおりであった。

小島　健　選

特選　名を知らぬ焚火仲間となりにけり　佐々木踏青子

【評】焚火は寒い日に火を焚き暖を取りつつ、会話を楽しみます。通りすがりの人も気さくに仲間入りOK！　そんな焚火仲間に名前などいりません。まして、○○社長、○○先生などごめんです。ああ、焚火も俳句も庶民のもの！　句姿良く省略の効いた諷詠に、人間的な親しみが溢れ、ウーン、いいなあ。このあったかい句に乾杯！

特選　鷹の目のすでに獲物を射止めをり　加瀬谷敏子

【評】まず、精悍な猛禽・鷹の鋭い目に焦点を絞り、緊迫を導きます。次に、必殺の炯々（けいけい）とした眼光は、もう獲物を射止めたと畳みかけます。この鷹の季語の本意・本情を確乎と把捉した技に拍手！　かように、虚実の間にも詩は宿ります。おお、まさに「文芸上の真」！ほら、何時しか読者の眼光も鋭くなって来たじゃありませんか。

秀逸　小春空儲け気分の野良仕事　小坂　富子

同　青白き月と見る間に吹雪きけり　小川　千草

同　村の名を貰ひし山の眠りけり　斎藤　淳子

佳作　山里の馬肉の煮込み寒波来る　高田　洋子

同　老いし身の和して動ぜず冬銀河　佐藤　悠水

同　小春日の出窓に猫の蕩けをり　岩谷　塵外

同　幾山に響く月夜の除夜の鐘　佐々木浩子

同　どか雪やげんこつ貰ひたるごとし　安倍　幸一

同　背の懐炉見え隠れしてボランティア　泉　千穂子

同　尿量る命の重さ初仕事　石井美智子

同　朝市に訛飛び交ふ年用意　塚本　佐市

同　凧揚や遠く白神晴れ渡る　田村　陽子

同　焼芋の熱くて持てぬ妻の留守　小杉　茶泉

佐々木　踏青子　選

特選　たましひの宿りて来たる里神楽　伊藤　青砂

【評】宮中神楽と異なり里神楽は、各地の神社等で行われる。鹿角市の大日霊貴神社の舞楽は、ユネスコ無形文化遺産であるほか、県内には有名な里神楽が多く、この句もそんな背景に詠まれたものか。鎮守の森も更け、神楽も佳境に入り見物人も一体となりその雰囲気にひたっている。特に、神楽師たちは自己陶酔し、シャーマンのようになってきた。

秀逸　訪ふことも訪はることも無き三日　遠山せつ子

同　奥宮を雲で閉ざして神の留守　岩谷　塵外

佳作　蛇行する川をあらはに大枯野　木村　登龍

同　灯の点り地より沸きたる小かまくら　滝澤　幸子

同　ゴシップの真つ只中の冬帽子　小林　呼溪

同　忍従を解き放されし母炬燵　森屋　慶基

同　終点で降りその先の雪深し　田村　陽子

伊藤　慶子　選

特選　頬杖を窘められて漱石忌　泉千　穂子

【評】夏目漱石の忌日は12月9日。暮れも間近の気忙しい一日、気の知れた仲間と会議中でもあろうか、ふっと頬杖をしてしまった作者の景が思い浮かぶ。中七の〝窘められて〟の表現は、平明ながらもとても新鮮で、大きな発見だと感じ入った。深読みをすれば、小説家・俳句作家でもある文豪の漱石自身に窘められているようで、季語漱石忌が活かされ、重厚で格調高い一句に胸を打たれた。

秀逸　鷹の目のすでに獲物を射止めをり　加瀬谷敏子

同　着ぶくれて人には人の影ありぬ　加藤　百桜

佳作　老いし身の和して動ぜず冬銀河　佐藤　悠水

同　枯野風見えざる楽器鳴りにけり　塚本　佐市

同　浮寝鳥浮寝の夢の輪を描く　木村　登龍

同　古暦はづして残る手の重み　斎藤　淳子

同　貼り交ぜの屏風の真中はせをの句　神成　石男

熊谷　尚選

特選　蛇行する川をあらはに大枯野　木村　登龍

【評】「枯野」と言えば、虚子の「遠山に日の当りたる枯野かな」がまず思い浮かぶ。虚子の句は、枯野からその奥にある遠山を眺めた景色を詠んでいるが、この句はそれとは逆に、山の方から枯野を見下ろしているのだろう。枯野になったために大河の流れの全貌があらわになった。その姿に驚嘆している作者の思いに、共感を覚えた。

秀逸　鷹の目のすでに獲物を射止めをり　加瀬谷敏子

同　炉話や長押（なげし）の槍の鞘走る　神成　石男

佳作　雨後の畑残る冬菜の鮮やかさ　滝澤　幸子

同　白山茶花そこだけ仄と日暮どき　宇佐見レイ子

同　居酒屋の名の変りゐる秋の暮　大石　愛子

同　雪寄せに一日（ひとひ）の力使ひけり　遠山せつ子

同　満開と言へどひそかに冬ざくら　大原たかし

五席⑦凧揚や遠く白神晴れ渡る　田村　陽子

十席⑥名を知らぬ焚火仲間となりにけり　佐々木踏青子

十席⑥尿量る命の重さ初仕事　石井美智子

十席⑥田仕舞ひや油井の櫓に星ひとつ　鈴木東亜子

十席⑥たましひの宿りて来たる里神楽　伊藤　青砂

互選の得点順位（6点まで13句）

一席⑯鷹の目のすでに獲物を射止めをり　加瀬谷敏子

二席⑩訪ふことも訪はることも無き三日　遠山せつ子

三席⑨誰もみな此の世の過客冬銀河　和田　仁

四席⑧蛇行する川をあらはに大枯野　木村　登龍

五席⑦老いし身の和して動ぜず冬銀河　佐藤　悠水

五席⑦着ぶくれて人には人の影ありぬ　加藤　百桜

五席⑦海鳴りを乗せて鰤船来たる　佐々木公平

五席⑦新しき籾殻に産む寒卵　高橋みつを

「あきたの文芸」第53集　支部員の成績

令和２年10月20日、秋田県が主催する「あきたの文芸第53集」が発表された。支部員の成績は次のとおりであった。

◇入　選

「白神抄」　塚本　佐市

「母」　阿部　清流子

「田植」　田村　陽子

基金協力者のご紹介

令和２年３月から12月までの間基金にご協力いただいた皆様を紹介します。

基金から今年度の拠出はなく、現在までの累計額は181万6153円となりました。今後とも支部活動に適正に活用させていただきます。

（敬称省略）

〔県南地区〕

阿部清流子・安倍幸一・石川恵美子・伊藤瑠紅

大石愛子・小川千草・加瀬谷敏子・加藤栄女

鎌田麗子・小坂富子・小林呼溪・西東善秋

斎藤淳子・佐々木浩子・澤田トキ・瀬田川博子

園部蕗郷・高橋みつを・滝澤正子・滝澤幸子

照井志げ女・遠山せつ子・二藤誠祥・藤原貢太郎

森屋慶基・山崎雅葉・渡辺素女

〔由利本荘地区〕

五十嵐義知・佐藤柳四郎・藤井淳一

〔中央地区〕

泉千穂子・伊藤恵美子・伊藤慶子・伊藤青砂

岩谷塵外・宇佐見レイ子・大原たかし・岡部いさむ・

小野祐子・加藤一弥・神成石男・木村登龍・熊谷尚・

佐々木あや子・佐々木踏青子・佐藤景心・佐藤茂樹・

佐藤悠水・島きく子・鈴木東亜子・高田洋子

千葉糸子・寺田恵子・藤原よう子・保泉草笛

水越洋三・山田恵子・山内誠子・米屋道子

〔県北地区〕

浅野法子・伊藤杯紅・櫻庭睦・田村陽子・塚本佐市

松橋テル子・柳川大亀

【中央俳誌への寄稿紹介】

佐藤景心氏は俳誌『遠矢』（主宰・檜紀代）より、同人欄の選評を依頼され令和2年11月号より3年4月号まで半年間寄稿したがそのダイジェストを紹介する。

（紹介者佐々木踏青子顧問）

〔11月号〕

ポケットの底にヘアピン寒戻り　野口　順子

ふと手にしたヘアピンという小なるものから、大自然の変化を感じとった感覚鋭い句である。

すぐ、「寸鉄のヘヤピン挿して炎天ゆく」（狩行）が脳裏を過ぎった。「寒戻り」と狩行句の「炎天」との取合せは真逆な発想であるが、いずれもヘアピンに触発されたことは紛れもない。

ピンと寒（カン）の音の響きも心地好い。

〔12月号〕

霞たり深田久弥の不帰の山　花土公子

深田久弥は「日本百名山」を誌した小説家であり登山家。昭和46年3月山梨県の茅ヶ岳登山中に病死しているが、人名を句に盛り込む成功例が少ない中、一読、脳裏を離れない句である。

それは、霞との取合せであろう。久弥は、春に亡くなっていることや、結婚生活が一度破綻していることを霞が連想させてくれるからである。

〔1月号〕

花ござにまろびて死後のこと友と　景山薫

人は、社会生活を送る上で交流する沢山の人がいたとしても、真に友達と言える人は限られる。まして、肝胆相照らす友となれば甚だ心許ないだろう。

句は、数少ない心腹の友との語らいである。花莫莚に転び死後を語らう様子は、虚子の「風生と死の話して涼しさよ」に通じるところがあり、死をテーマとしながら暗さ・湿っぽさが微塵もない。

〔2月号〕

人垣のどつと崩れて山車曲がる　木村紀美子

上五から中七に流れる措辞から、山車の曲がる勢いと迫力を感ぜずにはいられない。女性や子供の曳く山車とは違う、荒々しい男衆の曳く山車だろう。

また、人垣と山車の動きの関係には、芝不器男の句「麦車馬に遅れて動き出づ」に見るような微妙な時間のずれの捉え方があって、山車巡行の躍動感まで表現されている。

〔3月号〕

合宿の騒ぎ納めの花火かな　島本知子

花火の句には、その鑑賞であったり、花火を通した人の心模様を詠むことが多い中で、句にはこれらと少し趣の異なる楽しさがある。

昔、柔道の合宿経験のある私には、終了の開放感が脳裏を過ぎる。句に、花火の騒がしさに辟易するのではなく、合宿を終えた者たちへの優しい眼差しを見るのは、そうした経験があるからかも知れない。

〔4月号〕

疎ましきほどの快晴原爆忌　村上智美

原爆が投下された日の広島は快晴、長崎は曇だったという。その慰霊行事は、晴れの、それも溽暑の中で執り行われることがしばしば。上五「疎ましき」の措辞が、原爆を忌む心情に重ね表された。

空を仰ぐときは、「しあはせに目のあけられず花吹雪」（狩行）といった世界であってほしいものだ。

【句集紹介】

加瀬谷敏子氏が令和２年11月、句集「山ゆり」を上梓されました。

5句抽出

ひまわりの大きな笑顔貰ひけり
一と椀に海の声盛る蜆売り
天も地もなく大雪となりにけり
寒紅を引きてはそつと息放つ、
コロナ禍の真つ只中や稲の花

令和３年度県支部俳句大会の選者

寺島　ただし　先生

昭和19年宮城県生まれ。
昭和39年「駒草」入門、阿部みどり女に師事。
昭和41年駒草新人賞。43年駒草同人。
53年駒草賞。平成４年角川俳句賞。
俳人協会評議員。
句集に『木枯の雲』『浦里』『なにげなく』『寺島ただし集』

深慮・浅慮

★新型コロナ感染拡大の収まる様子が一向に見えない。今から百年前（大正７年）、世界の人口（当時18億人）の半数から３分の１が感染し、全世界で５千万人以上の人が死亡したとされているスペイン風邪は、流行が終息するまで３年かかっている。最近、ある住職から、スペイン風邪が流行った当時、県内でも沢山の方が罹患して亡くなっていることが過去帳に記されていることを伺い、慄然とすることがあった。過度に怖れてはならないが、新型コロナへの正しい対策を講じ、乗り切る覚悟が求められているようだ。★芭蕉は「柴門の辞」で、「予が風雅は夏炉冬扇の如し。衆に逆ひて用ふる所なし」と述べている。俳句はコロナ対策のためにはまさに無力ではあるが、コロナの時代を生き抜くための心の支えとなっていることは確かである。★令和２年の魁新報社新年文芸で、加藤百桜氏の「永らへて形ばかりの雑煮かな」と伊藤沐雨氏の「元日の横座に笑まふ九十歳」が第２席に入賞した。いずれも高齢化社会を生き抜く力を感じる句であり、俳句が生きる力を与えてくれることの証左である。★俳句仲間は、〝座〟による句会が出来ない中で、紙上句会やインターネットによる句会など、様々な形で俳句を継続している。今は、雌伏して力を蓄える時期と考えれば心にも余裕が出てくるだろう。コロナを駆逐することは難しいようだが、ワクチンの出現によって〝以前の日常〟が戻ってくる時期は遠くないはずだ。（景心）

支部員消息

令和二年

【二月】

☆**佐藤景心氏**　26日、俳人協会の要請により俳句文学館に「綴子大太鼓」を寄稿

【四月】

☆**小林呼溪氏**　日本現代詩歌文学館振興会評議員（俳句部門）に再任される。（任期・令和７年３月末）

【五月】

☆**園部蕗郷氏**　湯沢生涯学習センター主催「湯沢市民大学」俳句部門講師を勤める。令和３年２月まで。

【六月】

☆**佐藤景心氏**　魁新報の文化欄「俳壇」選者となる。

【七月】

☆**小林呼溪氏**　俳誌『岳』（主宰・宮坂静生）７月号「展望現代俳句ー満田光生」に〈葉ざくらや遺跡めきたる母校あと〉（『香雨』５月号所載）が採りあげられる。

【九月】

☆**佐藤景心氏**　県芸術文化協会発行「あきた芸文ニュース」（第41号）に第30回東北俳句大会・秋田大会を紹介

☆**佐藤景心氏**　12日、俳句文学館に５月書面開催となった支部総会・俳句大会を寄稿

☆**加瀬谷敏子氏**　18日、「さきがけ読者文芸」（７～９

月）で推薦作家となる。選者佐藤景心。

【十月】

◇19日、秋田市・生涯学習センターで開催された秋田魁新報社主催第93回全県俳句大会（選者長谷川櫂）で次の方々が入賞する。

☆**保泉草笛氏**　特選・甚平も体の一部百二歳

☆**岡部いさむ氏**　特選・暖炉焚け巨詠子瓦風火峰亡し

☆**伊藤恵美子氏**　佳作・たそがれや庭師帰りし庭涼し

☆**佐々木公平氏**　佳作・牛起きしあと夏草の立ち直る

☆**二藤誠祥氏**　佳作・葛の花露とびかかる峠かな

☆**山内誠子氏**　佳作・山神へ虎魚を奉るマタギかな

☆**20日、斎藤淳子氏**　県文化振興課主催の「あきたの文芸」第53集俳句部門の選者として選評

☆**岩谷塵外氏**　同じく俳句部門の選者として選評

【十一月】

☆**石井美智子氏**　所属誌『風土』11月号で第43回桂郎賞佳作「寒燈」受賞

☆**加瀬谷敏子氏**　句集『山ゆり』上梓

☆**佐藤景心氏**　俳誌『遠矢』（主宰・檜紀代）11月号より同人作品評に当たる。令和３年４月号まで。

【十二月】

☆**佐藤景心氏**　俳人協会の要請により俳句文学館12月5日号に「師走の行事・風物詩あれこれ―なまはげ」を紹介

令和三年

【一月】

◇1日、魁新報社新年文芸に次の方々が受賞する。

☆**加藤百桜氏**　第2席・永らへて形ばかりの雑煮かな

☆**伊藤沐雨氏**　第2席・元日の横座に笑まふ九十歳

☆**田村陽子氏**　第3席・俎板の鯛に一礼お元日

☆**阿部清流子氏**　佳作・百歳を生きるしあはせ初鏡

☆**岩谷塵外氏**　佳作・若井汲む杉の柄杓も芳しく

☆**山田草人氏**　佳作・蓑笠に藁の早苗や雪田植

☆**池田崇氏**　佳作・手毬唄さも突くやうに子に聞かす

☆**伊藤青砂氏**　佳作・燦さんと総理生家の鏡餅

☆**浅野法子氏**　佳作・我が人生写し続けて初鏡

☆**石井美智子氏**　佳作・白神の湧水六腑へ大旦

【二月】

☆**10日、斎藤淳子氏**　大仙市芸術文化協会の第15回芸術文化賞受賞

男鹿の来訪神　なまはげ

佐藤　景心

大晦日の夜、男鹿半島の多くの集落では、青年らがなまはげに扮し、ケデ（衣裳）をまとい、藁沓を履き、出刃包丁や桶などをもって「ウォー」と唸り声をあげ、「泣く子はいねが！」「親の言うこど聞がねこ子はいねが！」などと大声で叫びながら家々を巡る。

なまはげを迎え入れた家の主人は、必死に子どもを守りながらひたすら謝り、酒や料理で丁重に持て成して機嫌をとる。

男鹿の人々にとってなまはげは悪鬼などではなく、怠け心を戒め、無病息災・田畑の実り・山の幸・海の幸をもたらす年の節目にやってくる来訪神である。

なまはげ伝説には、漢の武帝が不老不死の薬草を求めて男鹿に来たという説をはじめ、修験者説・山の神説・漂流異邦人説などがあり、地域の人々によって口承されてきた。そのため、集落によってなまはげの面が木彫りや笊・紙であったり、ケデが藁や漁網であったりと大きな違いがあり、その多様さには驚くばかりである。

なまはげは、秋田が世界に誇る民俗行事であり、この行事と男鹿市北浦の真山神社の神事「柴灯祭」とを組み合わせた観光行事「なまはげ柴灯まつり」が昭和39年から毎年2月の第2金・土・日の3日間、同神社を会場に開催されている。

まつりでは、無病息災の護符とされているケデから落ちた藁屑を求め、国内外の観光客が競って拾い集める光景が繰り広げられる。

撒き散らすなまはげケデの藁の屑　景心

異形の仮面・藁で作った衣装をまとい家々を巡る

令和２年12月5日付　俳句文学館

令和2年度支部役員

〔顧　問〕佐々木踏青子（本部幹事）・伊藤恵美子・伊藤青砂・石川恵美子

〔支部長〕山崎雅葉（本部評議員）

〔副支部長〕木村登龍・園部蕗郷・水越洋三・佐藤景心（本部評議員・事務局長）

〔常任幹事〕工藤ミネ子・神成石男・斎藤淳子・岩谷塵外

〔幹　事〕森屋慶基・保泉草笛・山内誠子・伊藤慶子・熊谷尚・石井美智子・泉千穂子・佐藤茂樹

〔監　事〕

人事関係紹介

☆卒寿・米寿の本部会員（※生年月日順）

・卒寿
伊藤瑠紅氏

・米寿
山崎雅葉氏
高橋晴子氏
佐々木踏青子氏

敬老の日にあたり、つつしんでご長寿のおよろこびを申し上げます。
心ばかりですが、ここに記念品をお贈りし、いよいよのご加餐を祈ってやみません。

令和二年九月二十一日

公益社団法人 俳人協会
会長 大串章

卒寿・米寿の本部会員に送られた祝詞

☆加入新会員

・県南地区
高橋京山氏（さたけ俳句懇話会）
瀬川恵美子氏（さたけ俳句懇話会）

・中央地区
佐々木あや子氏（森の座）

☆退会会員

・県南地区
高橋一秋氏（嘶吟社）
橘節子氏（春燈）
小形柳明氏（ゆざわ吟社）
半田多佳夫氏（森の座）

・中央地区
伊岡森礼子氏（俳星）

・県北地区
伊藤豊子氏（俳星）

訃音

●小杉茶泉（樹氷）
令和２年４月３日ご逝去　享年74歳

●大野一郎（新雪・駒草）
令和３年１月11日ご逝去　享年95歳

謹んでご冥福をお祈り申し上げます
合掌

令和３年度 各種大会の予定

○俳人協会創立60周年記念第60回全国俳句大会
・令和３年４月15日（締切）

○俳人協会秋田県支部俳句大会
・令和３年５月中
・紙上句会

○俳人協会東北俳句大会・岩手大会
・令和３年９月中
・紙上句会

○第35回国民文化祭・みやざき２０２０
・「神話のふるさとみやざき」全国俳句大会
・令和３年11月15日
・宮崎市・宮崎市民プラザオルブライトホールなど

○第29回吟行俳句大会
・10月上旬（予定・案内通知）

○第25回支部会員鍛錬紙上句会
・11月中（予定・案内通知）

編集後記

★県内の俳句人口が減少しているのではないかと危惧している。令和２年中、県内で本部会員になられた方はなく、漸減する支部会員数に歯止めがかからない。俳句の良さをどう伝え、特に、若い人達を迎えるにはどうすべきか、悩んでいるところである。

★俳人協会は今年創立60周年を迎える。多くの記念行事を予定しているが、コロナ禍にあって滞りなく実施できることを望むばかりである。

★『秋田蕗』は支部と支部員の架け橋である。支部員の句集上梓、各種大会での活躍状況、指導句会立ち上げ・変更、訃報など、自薦・他薦を問わず早めに事務局までお知らせいただきたい。（景心）

俳人協会秋田県支部
事務局・会計・「秋田蕗」編集発行
〒〇一〇－〇八〇二
秋田市外旭川字大畑五八－四　佐藤　景心
電話　〇一八－八六八－〇七四四
携帯　〇九〇－二二七一－〇六四二
メールアドレス　keisin53@cna.ne.jp
ゆうちょ銀行振替
口座番号　02290－9－127266
俳人協会秋田県支部
印刷　有限会社　三浦印刷
郵便番号〇一〇－〇九二五
秋田市旭南三－七－五
電話〇一八－八六二－二七九二